

# ネット型教材（バレーボール）1年間の成果と課題 ～中学校特別支援学級に於ける教材と教具の工夫～

鈴木 和司（東京都西東京市立保谷中学校教諭）

## 1 はじめに

「バレーボール」は、ネット型の球技であり、小学校学習指導要領体育編（2008）「球技（ネット型）」の中での運動例としては「ソフトバレーボール」が例示されている。「バレーボール」は、周知の通りネットをはさんだ2チームが互いにボールを相手コートへ打ち合うチームスポーツである。サーブ・レシーブ・トス・アタックの基礎・基本の運動技能をもとに、三段攻撃や連携した動き、相手チームの特徴を踏まえた作戦等の特徴がある。

1895年アメリカのWilliam G Morganによって考案された。テニスとバスケットボールをミックスして作られたと言われ、当初は両チームが同人数であれば何人でもよかったとされている。

ボールを落とさずにボールを「拾う」「つなぐ」「打つ」ため、運動技能は難しいように思えるが、ルールの工夫や用具の工夫によって基礎・基本の技能が習得でき、バレーボール本来の特性を楽しむことができる。

以上のことから、運動技能差のある特別支援学級の授業で、教材・教具を工夫することによって、生徒がより運動の楽しさを感じ、自己肯定感をより味わえることができるのではないかと考え、実践した。

## 2 対象学校・学級

東京都西東京市立保谷中学校 1～3年生特別支援学級 1クラス（平成26年度41名；男子28名女子13名）を対象とした。

当学級は、通常の学級に併設される特別支援学級であり、在籍する生徒は、軽度知的障害と軽度情緒障害の生徒で構成されている。

体育の授業については、メインティーチャー1名にT2～T4までの5名で授業を行った。

## 3 「形成的授業評価票」

「形成的体育授業評価票」（高橋他，1994）は、子どもが毎時間の体育授業をどのように評価しているかを知るために開発されたものである。質問項目の「1-3」は「成果」について、「4-5」は「意欲・関心」、「6-7」は「学び方」について、「8-9」は「協力」について問うている。これらの次元は、観点別評価項目にほぼ対応するものとなっている。

上記の4つの次元はすべて3点満点の平均点を算出して結果を導く。集計方法は、調査用紙の「はい」に3点、「どちらでもない」に2点、「いいえ」に1点を与えて、全体の得点を平均して集計する。全体の合計が2.58点を越えていると、クラスの子どもたちが体育授業に対して肯定的な態度を示しているといえる。2.77点以上になると、非常に肯定的な態度を示していると解釈できる。「形成的授業評価診断基準」に照らすと、各項目に子どもの評価を5段階で評価することができる。

この調査を単元中の毎時間、あるいは単元のはじめ・なか・おわりに1度ずつ行うことから、単元の進捗に伴った授業改善の情報を知ることができる。

特別支援学級の生徒には、知的なハンデを抱える生徒がいるので、その場合は教員が一人付き、内容をわかりやすく説明しながら、回答を行った。

## 体育授業についての調査

保谷中学校のびる学級 年 男・女 名前 ( )

◎ 今日の体育の授業について質問します。下の1～9について、あなたはどう思いましたか。当てはまるものに○をつけてください。

- 1 ふかく心にとのこることや、かんとすることがありましたか。(はい・どちらでもない・いいえ)
- 2 今までできなかったこと(運動や作戦)ができるようになりましたか。(はい・どちらでもない・いいえ)
- 3 「あっ、わかった!」とか「あっ、そうか」と思ったことがありましたか。(はい・どちらでもない・いいえ)
- 4 せいっぱい、ぜんりょくをつくして運動することができましたか。(はい・どちらでもない・いいえ)
- 5 楽しかったですか。(はい・どちらでもない・いいえ)
- 6 自分から進んで学習することができましたか。(はい・どちらでもない・いいえ)
- 7 自分のめあてにむかって何回も練習できましたか。(はい・どちらでもない・いいえ)
- 8 友だちと協力して、なかよく学習できましたか。(はい・どちらでもない・いいえ)
- 9 友だちとおたがいに教えたり、助けたりしましたか。(はい・どちらでもない・いいえ)

### 【形成的体育授業評価票】

#### 4 単元計画と評価規準

特別支援学級の授業は、「実態に応じた指導」が重視され、学習指導要領の適用は、取捨選択しながら行わなければならない。N学級では、運動技能差があり、個に応じた指導が強く求められている。その中で、平成26年度は、学級に所属する生徒の実態に応じて、小学校学習指導要領と中学校学習指導要領、特別支援学級学習指導要領の中から、学習内容及び評価規準を取捨選択しながら、授業構成を行った。

運動に対して否定的な生徒や過去の成功体験が少なく授業に対して学習意欲の低い生徒がいる。そのため、ゲーム教材を多くし、また教具を工夫することによって興味・関心に訴えかけると共に、仲間と協力して技能を高め、運動に対する肯定感を味わわせることをねらいとした。また、基礎・基本に基づいた個人技能の習得を単元初めに設定することにより、単元後半のタスクゲームやゲームで運動の楽しさを味わうことをねらいとした。

時	1	2・3	4・5	6～7	8～10
	集合・あいさつ・準備体操・集団ベースランニング				
学習活動 学習内容	オリエンテーション チーム編成 ドリルゲームの指導	<b>個人技能習得</b> サーブ・ビニールキャッチ	<b>個人技能習得</b> サーブ→ボード→キャッチ	<b>連携習得</b> 4人組レシーブ・アタック	<b>連携習得</b> 4人組レシーブアタック
	試しのゲーム	<b>個人技能習得</b> サーブ→ボード→キャッチ	<b>個人技能習得</b> サーブ→ボードレシーブ	<b>タスクゲーム</b> セットアタックゲーム	<b>リーグ戦</b> 4人組ファウストボール (セットゲームorラリーゲームをチームで選択)
	片づけ・まとめ・自己評価・あいさつ				
学習活動に即した 具体的な評価規準 [評価方法]	・バレーボールの特性を知り、ゲームを正しく理解することができる。[発表・行動観察]	・友達と協力しながら運動に進んで取り組み、安全に運動することができる。 ・落下地点に入り、レシーブができる。 ・ゲームのルールやきまりを理解することができる。[行動観察・自己評価]	・自己の特徴を活かし、技能を高めるために思考・判断することができる。 ・トス、アタックが狙ってできる。 ・ゲームのルールやきまりを理解し、行動することができる。[行動観察・自己評価]	・役割を理解し、三段攻撃ができる。 ・ルールやきまりを守りながら、友達と協力して、ゲームを楽しみ、喜びを分かち合うことができる。[行動観察・自己評価]	

## 5 教具・教材の工夫

### ○教具の工夫

ネットについては、規定のバレーボールのネットは使用せずに、バドミントンのネットを使用した。

ボールについては、ソフトサーブ軽量バレーボール（写真1の左）とレクリエーションボール（写真1の右）を使用した。あたっても手の痛みを軽減することとワンバウンドでも弾むことを考慮した。

ボールの落下地点へ素早く動くことを学ぶために、ビニール袋を用いた。

レシーブボード（写真2）を作成し、レシーブの際に平行な面を作りやすくすることと手の痛みの軽減を考慮した。



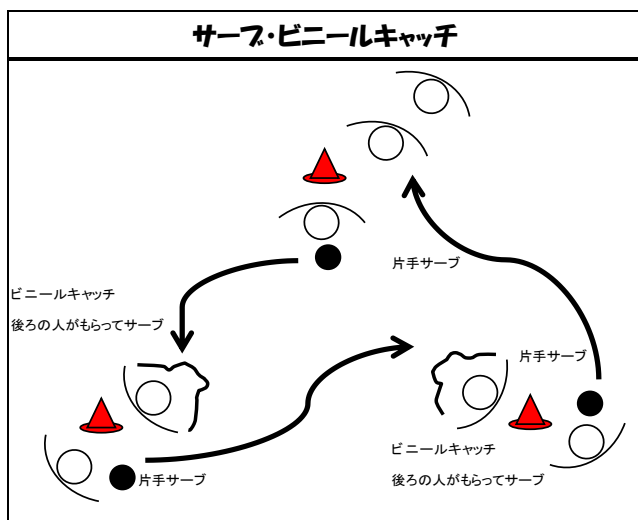
【写真1】



【写真2】

### ○運動教材

単元の始めに、個人技能を高める教材を多く取り入れた。しかし、単調な教材ではなく、ゲーム性を取り入れると共に、教具を工夫した。前述のビニール袋やレシーブボードがあげられる。

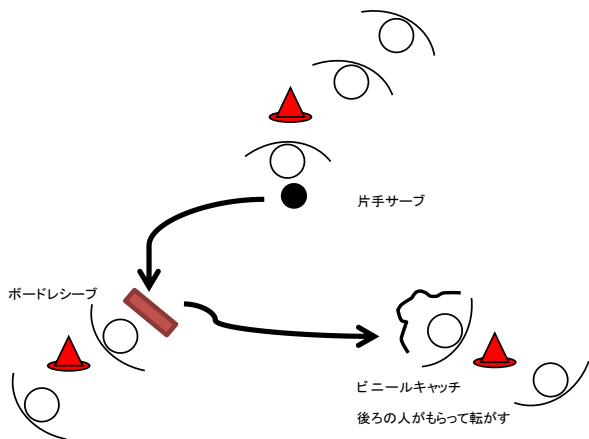


#### ルール

チームごと、三角形に並びサーブ→ビニールキャッチを順に行う。

片手でのサーブから、体の正面でビニール袋に入れてボールをキャッチする。尚、ワンバウンドからノーバウンドへと技能段階を高めていく。

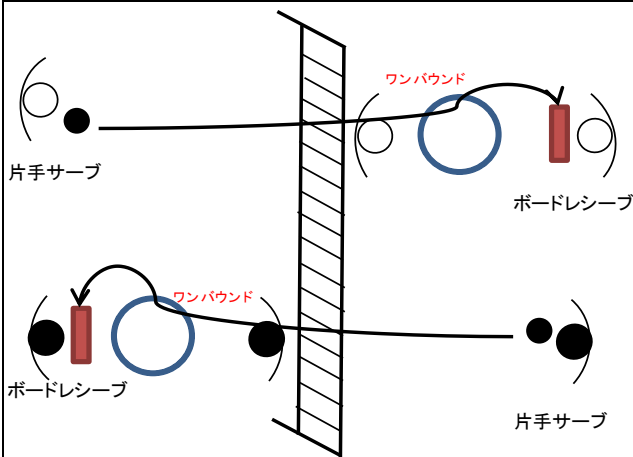
### サーブ→ボード→キャッチ



#### ルール

チームごと、三角形に並びサーブ→→ボードレシーブ→ビニールキャッチを順に行う。片手でのサーブからボードで次の仲間へつなぎ、体の正面でビニール袋に入れてボールをキャッチする。尚、ワンバウンドからノーバウンドへと技能段階を高めていく。

### サーブ→ボードレシーブ



#### ルール

片手サーブから行い、丸(フープを使用)の中に、ワンバウンドさせ、ボードでレシーブし、ネット際の仲間につなぐ。ネット際の仲間は、ボールをキャッチする。



## 6 「球技：ネット型 バレーボール」単元の子どもの評価票の結果と考察

毎授業の終わりに、生徒が自己評価を行った。各項目は、教員が読み、特に支援が必要な生徒については、教員一人が横に付き添い、内容をわかりやすく説明しながら行った。

○学級全体

表1は、「形成的体育授業評価票」の結果を示しており、図1はその推移を示している。

すべての次元において、時間数によって変動はあるものの、自己評価平均点数の向上がみられた。特に、「意欲・関心」次元については、2.73点～2.91点の高い得点間で推移している。

「成果」及び「協力」次元においては、単元の後半に高い平均得点を示している。

以上のことから、授業の時間数が経ていくにつれて、学級全体が体育の授業に対して、より肯定的に変容したことが分かった。また、生徒が毎授業、高い意欲及び高い関心を持って授業に臨んでいたことが分かった。さらに、単元の後半では、単元を通して運動課題が「できる」と実感し、仲間と協力して学習に向かおうと実感している生徒が多いことが分かった。

しかし、8時間目の授業では、「成果」及び「学び方」次元について、大幅な平均得点の低下がみられた。単元計画に照らし合わせて考えると、8時間目よりゲーム方式になり、チームの勝敗が個人の「成果」に大幅に関わったことが推測される。また、「学び方」次元では、うまくゲームの理解ができなかったことが推測される。

表1 「形成的体育授業評価票」の結果

	第1時	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時	第7時	第8時	第9時	第10時
総合評価	2.60	2.64	2.65	2.67	2.64	2.72	2.67	2.57	2.67	2.81
成果	2.43	2.45	2.42	2.54	2.56	2.58	2.56	2.37	2.67	2.78
意欲・関心	2.81	2.84	2.86	2.85	2.73	2.83	2.80	2.78	2.79	2.91
学び方	2.63	2.66	2.62	2.68	2.63	2.74	2.67	2.47	2.53	2.73
協力	2.62	2.72	2.82	2.68	2.68	2.81	2.72	2.76	2.71	2.83

(3点満点)

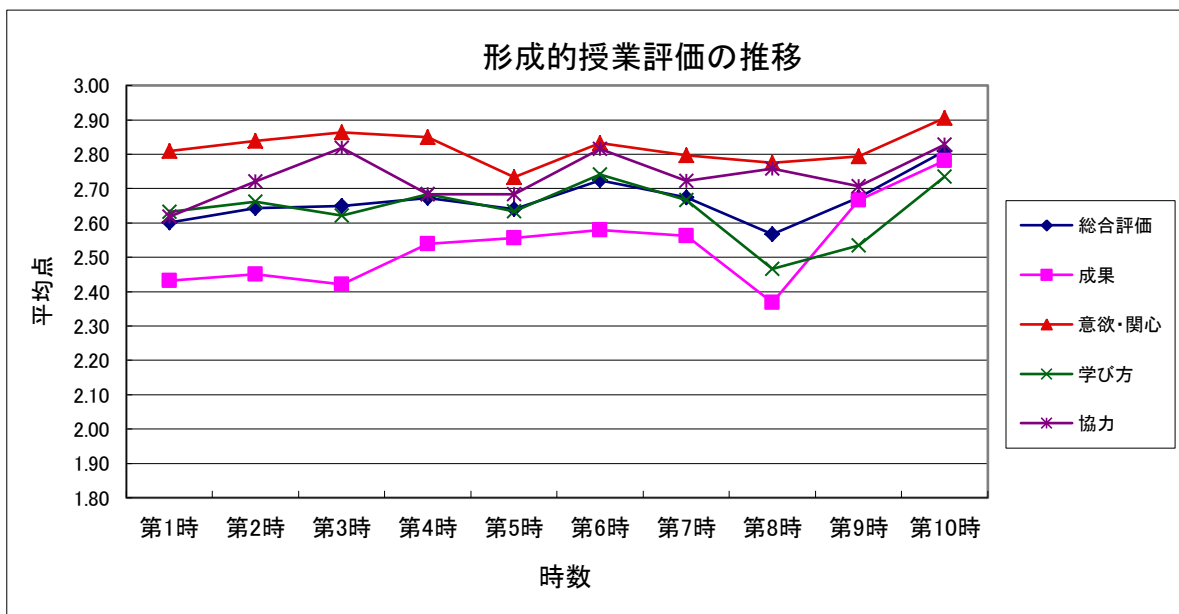


図1 「形成的体育授業評価票」の推移

## 7 成果と課題

本実践を通して、教材・教具を工夫することで、生徒が体育の授業に対して、肯定的に変容することがわかった。特に、教材・教具を工夫することによって、生徒が高い「意欲・関心」をもって授業に取り組むことが示唆された。

技能面においては、技能習得の目的にあった教具・教材を使用することによって、単元後半に運動課題に対して「できる」と実感する生徒が増えることがわかった。また、既存の競技スポーツのルールや規則にとらわれ過ぎずに、生徒の実態に応じたルールや規則を設定し、授業を行うことが大切であることが示唆された。

しかし、教材・教具を工夫することによっての生徒の技能の変容を精緻に示すことに課題が残った。そのため、今後は、映像等を用いて、実際に生徒がどのように変容したのか、あるいは身体操作の変容を分析することが必要である。また、ICT 機器を活用し、生徒自らが自己の運動の課題をみつけ、改善していく授業をしていく必要がある。

### 【引用・参考文献】

- 1) 岩田靖 (2014) 体育における教具研究の課題と展望. 体育科教育 2014 年 4 月号, pp.10-13
- 2) 佐藤洋平・石田智久・濱本圭一・細越淳二 (2013) ネット型ゲームの授業計画と 3 つの実践. 体育科教育 2013 年 5 月号, pp.14-27
- 3) 高田俊也ほか (1991) 体育授業における新しい授業診断法の作成—特に、小学校高学年を対象に—. 体育授業改善のための基礎的研究. 平成 1・2 年度文部省科学研究費研究報告書, pp.172-182.
- 4) 高橋健夫・大友智・高田俊也 (1994) 資料:体育の授業分析の方法. 高橋健夫 (編著) 体育の授業を創る. 大修館書店, 東京. pp.233-245.
- 5) 高橋健夫 (編著) 体育授業を観察評価する. 明和出版, 東京. pp.8-15
- 6) 高橋健夫 他 (2011) 新しい体育授業の授業づくり. 『ステップアップ中学体育』教師用指導書. 大修館書店. p.p.36-37
- 7) 波多野義郎ほか (2014) WONDERFUL SPORTS. 新学社. p.p.163-182
- 8) 文部科学省 (2008) 中学校学習指導要領解説保健体育編. 東山書房.
- 9) 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説体育編. 東洋館出版社.
- 10) 文部科学省 (2009) 特別支援学校学習指導要領解説. 教育出版.